



子ども達は命に触れ、
生と死に関わることで
大切なことを学びます。

生き物たち とのふれあい

～命の尊さへの気づき～



① ② ③

昨日、虫を過剰なほど嫌がる **Poi 1** 子が多いのですが、森林に入ると必ずといってよいほど昆虫達とのふれあいがあります。幼児の頃から **生き物とのふれあい** **Poi 2** を続けていると、生き物を愛する心はずっと良く育まれるのではないのでしょうか。

初夏の森林で「なんだか夏の声が聞こえる」とみんなが言いました。それはエゾハルゼミの蝉時雨です。それを知ると、みんな一斉にセミの抜け殻を見つけて出しました。「目(の部分)もある!」「透明だ!」と驚く子ども達。「どうやって脱いだんだろう?」「捕ってみたい!」 **Poi 3**

みんな目を輝かせています。カメムシを手に乗せて臭いをかいだ子が顔をしかめています。土の壁に空いた穴を「リスがいるのかも」と探求する子もいます。

様々な虫たちと出会い、知らなかったことに触れたりびっくりしたり、違う生き物とのふれあいは、世界に生きているの

が人間だけではないことや、それらの生き物と支え合って生きていくことの大切さを学ぶために、大切な礎になります。

ある時、森林の小川でつかまえた小さな魚達を、みんなが「持って帰りたい」と言い、相談した結果連れて帰ることになりました。帰ってからもみんなは気がな

って、水槽をのぞき込んだり、魚に触ったりしています。翌日、半分以上の魚が **死んでしまっている姿** **Poi 4** を見て子ども達は **泣きそうな顔です** **Poi 5**。先生は「どうして死んでしまったと思う?」と子ども達に考えてもらうことにしました。みんなは魚の気持ちになっ

て色んな事を考えている様子です。子ども達はそんなやりとりの中から、自分たちが何を

しまったのか、**死ぬことってどんなこと** **Poi 6** なのか、生き物たちの死に触れることで初めて、子ども達は大切なことをたくさん理解したのです。

この活動の流れ



活動	声のかけかた
: 導入 : 出かける前のお話 写真①	生き物、動物の絵本は、とりわけ子ども達の関心を惹きます。また、虫捕りや魚捕りには、否応なく盛り上がることでしょ
: 本体 : 生き物は、虫たちを捕まけて食べて触るだけでも、色んな生き物とそれを見させてあげます。 写真②	子どもが興味をもつ色んな生き物を、大人が嫌がってはいけません。無理はせず、強い拒絶は避けて、一緒にその生き物について調べたり、子どもの発見に共感しましょう。
: まとめ : 生き物に持つ執着は、いい形で継続させてあげましょう。 写真③	生き物を飼いたいという子を頭ごなしに否定してはいけません。飼うことではじめて学ぶことはとても多いからです。
: 発展 : 生き物を飼ってみましょう。最初は小さな動物から、次第にウサギや犬など、大きな動物との深い関わりを与えてやってください。	





ここがポイント！

この活動の環境教育的効果はここにある！

Point 5

泣きそうな顔

→ **好きになり
大切にする**

自分と関わった生命は子どもにとって特別な存在になります。それが死んでしまう悲しみは、子ども達の心に豊かな情緒と命を大切にする心を育みます。

Point 1

虫を過剰なほど嫌がる

→ **知識と観察する力**

これは、親の虫嫌いが刷り込まれていることが多いようです。虫や自然に触れないことは、それだけ好奇心や観察力を育てる機会をなくしてしまいます。

Point 3

透明だ！

→ **好奇心を育てる**

子ども達の好奇心には目を見張るものがあります。それはあらゆる物に向けられますが、生き物が引き出す幼児の好奇心は無限大です。

Point 2

生き物

との触れあい

→ **多様な視点
と考え方**

生き物はコンピューターのような杓子定規な反応をしません。生き物は、子ども達に考える余地を与え、多様な視点と考え方をもたらします。

Point 6

死ぬことって
どんなこと

→ **死を感じる**

最近死を遠ざける教育が主流ですが死を実感することで初めて生を知り、命の大切さを実感できるのです。

Point 4

死んでしまっている

→ **命を大切
にする心**

捕まえた生き物を死なせてしまうのは、命・自然・資源が有限の物であることを認識させます。そしてそれらと自分とのつながりを意識できます。



森林について

好きになり大切にする

知識と観察力をつける

自分とのつながりに気づく

心身の発育について

感覚と感性を育む

身体能力を育む

好奇心を育む

心のエコロジー

コミュニケーション能力を育む

多様な価値観を育む

主体性や自尊心を育む

その他 多様な視点と考え方 命を大切にする心を育む 死を感じる

この活動の
環境教育的
な要素



同じ重さ



ワシは
このくらい。

森の鳥さんたちの仲間。スズメの大きさのヤマガラはこうじゃ。最近のイチゴはすごくでかいものがあるが、こいつは中くらいの大きさじゃ、どっちが重いかな。この子は一六グラム。イチゴは一五グラムなのじゃ。おんなじくらいの大かさなのじゃ。みんな想像はつくかな？イチゴとおんなじ重さの鳥さんたちがとんでるんじゃぞ。鳥さんはイチゴと同じ重さなんて考えたことあるかな。ヤマガラさんの半分以下という重さの鳥さんもおるのじゃ。

みんなはイチゴが大好きじゃろう。空とぶイチゴを想像してごらん。なんだがおかしいな。森の鳥さんとイチゴを比べてみた。

イチゴと
コトリ

は森の
おじいさんの



その⑤

冬の森林遊びは
子どもたちにとっては
遊園地みたいなもの。
冬こそ本番です。

森の雪遊び

～身体能力を育てる～



この活動の流れ

活動	声のかけかた
: 導入： 出かける前のお話 写真①	「尻滑り」「木登り」「雪合戦」など、子どもたちの気持を高ぶらせやすい言葉があります。上手に遊びを促します。
: 本体： 雪の上では子どもから遊びが自然に始まります。 写真②③	雪の上では動物の足跡や小鳥の糞も観察しやすいです。生き物の気配を感じながら子ども達が自然に見つけていこう。木登りや尻滑りなどは大人が積極的に遊び始めてもよいと思います。尻滑りは、スピードの出過ぎと前に衝突しないように気を付けます。
: 発展： 雪は優れたクッションです。木に登っていて落ちてても、転んでも大丈夫。普段危険でできない遊びにもチャレンジしてみても？	

雪の上で遊ぼうと思っても知らず知らずのうちに体力がつかめます。

冬は何かと外に出るのがおっくうですが、冬こそ森林は自由な遊び場に変身。子ども達は冬こそ外遊びに大喜びなのです。寒いのでスキーウェアに身を固め、「北風小僧の寒太郎」の歌を振り付

お楽しみのは尻滑りです。自分たちで作った滑り台に最初は「怖い」と言っていた子もすぐに「楽しい」の歓声に変わっています。「何十回も長靴が埋まっちゃった」と言いながらも遊びをやめようとしません。

きで歌いながら森林にでかけます。いつもはササだらけで登山道以外は歩けない森の中も、雪が積もればどこへでも行けます。軽いので雪に沈まない子どもたちは、好きな場所を泳ぐように歩いてゆきます。そのうち動物の足跡を見つけた子ども達、早速相談して、道を外れて動物の足跡を追うことに決定です。立って歩くと沈んでしまう子も、四つん這いになるとらくらく進めます。ずんずん山を登った後は、斜面を見つけて

そうこうしているうちに木に登る子ども出てきます。夏は危険な遊びですが、雪がたくさん積もっているから落ちてけがをする心配がありません。びしょぬれになっている子ども達も、濡れているのは雪のせいなのか汗のせいなのか分からなくなってきました。

大きな木の根元のウロを調べる子どももいます。「ここにはクマが冬眠しているかもしれないよ」「こっちは穴は小さいからリスのおうちだね」冬の森でなくては感じられないこと、できない遊び。森林はいつでも子ども達の好奇心と遊びの心をいっぱい受け止めてくれます。

自分たちで

ずんずん山を登った後は、斜面を見つけて

自分たちで



ここがポイント！

この活動の環境教育的効果はここにある！



Point 5
尻滑り

→ 脳の活動を 活発にする

冬だけの遊び。坂を登る苦し
さの後に滑るという楽しさを感
じられますし、危険の中に潜
む楽しさに身を置くことは、
脳内物質の分泌を活発
にしてくれます。

Point 1
自由な遊び場

→ 情操の安定

自由に遊び回ることで、子
ども達はストレスを発散し、
情緒を安定させることがで
きます。だから森林の中
ではケンカが起こ
りません。

Point 3

どこへでも
行けます

→ 身体能力を 育てる

雪は歩くために適度な抵抗
と不安定感をもたらします。
バランス感覚、体力など、
身体的な発達を促し、こ
れは知能の発達につな
がります。

Point 2

いつもはササだらけで

→ 多様な価値観

いつも歩いている場所も、
雪が積もってから行けば新し
い気づきや発見があり、一
つの物が多様な側面を持
っていることに気づか
されます。

Point 6
木に登る

→ 感覚と感性 を育む

木登りは身体能力を飛躍的
に高めます。また、枝を握っ
たり木の肌に触れることは
幼児期の脳に刺激を与え、
感覚統合を促します。

Point 4

動物の足跡

→ 知識と観察 の力をつける

動物の気配が強く感じられ
るこの季節は、森林という環
境に様々な生き物が生きて
いることを感じさせます。
それは、森林を大切に
感じるきっかけです。

森林について

好きになり大切にする

知識と観察力をつける

自分とのつながりに気づく

心身の発育について

感覚と感性を育む

身体能力を育む

好奇心を育む

心のエコロジー

コミュニケーション能力を育む

多様な価値観を育む

主体性や自尊心を育む

その他 情操の安定 脳の活動を活発にする

この活動の
環境教育的
な要素



たぬきの足跡じゃ。



たぬきの足じゃ。

足あととは雪の上についているので
はよくわかるもんじゃ。夏にも足あと
のつきやすいところがある。それほど
こじゃ。雨のあとがいい。そうじゃ、
泥の上なのじゃ。泥の上をよく見て
ほしい。誰の足あとがついているかな。
足あとをつけるのは森のキツネさんや
タヌキさんだけかな。足のあるのは、
鳥も虫もいるのじゃ。ミミズさんのは
ったあともあるぞ。そうじゃ それに
雨のあともついでとぞ。ポツポツと丸
いあとがつく。泥は森の日記帳なのじ
ゃ。なんと書いてあるかちよっとのぞ
かせてもらおう。

森の日記帳
を見てみるのじゃ

その⑥



ごてんさ かがそう

～想像力と好奇心～

木の穴は
色んな動物の「御殿」。
みんなが見つけたのは
だれの御殿？



この活動の流れ

活動	声のかけかた
：導入： 出かける前のお話 写真①	おぼり「ごてんにすむのはだれ？」を読んであげるとよいでしょう。
出発	森林に着いたときには子ども達の目はもうごてんさがしに集中しています。
：本体： ごてんさがし そのほかの生き物さがし 写真②③	上手にキリリキヤネズミの生活の痕跡を見つけ、子ども達の興味を膨らませてあげられると良いですね。
：まとめ： 帰ってきたときのお話	みんなが遊んだところには色んな生き物が住んでいるというお話をしてあげても良いかもしれません。
：発展： この活動から生き物の世界へつなげるのは簡単なことです。動物園などを使って森林の自然への興味を引っかけましょう。	

木の穴は大切なのかな。
どうして大切なのかな。
無くならないかな。

森林に行くと、さまざまな木の間を見かけます。多くの場合、木の穴は何かしらの動物が利用するものです。そんな穴だからこそ、一度引きつけられた子ども達の興味は離れません。

「ごてんにすむのはだれ？」という絵本の人気が高まっているとき、みんなで森林に出かけていきました。バスから降りるとみんな先生を追い越す勢いで歩いているときも「へじさんいるかなあ」と、生き物の姿を探す子ども達。木のウロ（ごてん）を見つかるたびに「ごてんよごてんーよ、すんでいるのはだあれ」と歌いながら覗き込む子ども達の目は、本当にキラキラと輝いています。「これはキツツキのごてんだ」「穴

がたくさん空いているのはミツバチじゃない？」
「こんな会話が自然と聞かえてきます。そのうち一番大きなごてんを見つけると「これは絶対クマのごてんだよ」「じゃあ、札幌にもクマがいるの？」「先生のそばから離れるな」子ども達は絵本の世界に入り込み、現実の世界と結びつけてさらに想像を膨らませています。

Point 4 こんな時、子ども達の空想力にもとても感動します。大きな手のひら型の葉っぱを拾って「天狗の葉っぱだ！（だるまちゃんとしてんぐちゃんより）」と大喜びする姿。ササの葉の上にいるカタツムリを「キララさんだ（やなぎむらのおはなし）」と呼ぶ姿。森に遊びに来ているはずなのに、発見の一つ一つが絵本の世界に通じている

Point 6 ことを、改めて感じました。